

が大負債を有し其の工場設備が實際に於て債權者に擔保として提供せられ居る以上之れを加算する事は極めて妥當の處置なりとす、之れ漢冶萍公司は日本に多額の債務を有し此の負債に對しては一定の利息を支拂はざる可からざればなり、萬一此等の費用を製産品に賦課せざるときは其の製品賣價なる者は所有餘利を含蓄する者なるが故に事實に於ては夫れ丈け會社は金錢上の損失を被るに至るの結果を生ず、本項目利息の百分率を他に元價に關する項目と比較するときは其率高きを以て斯の如き反對論を生ずる結果となる事を容易に看取し得べし。

以上元價の各項目に就きて之を考慮するときは直接勞働賃銀は比率上最も些少にして原料の比率最も大なる事を見るべし而して右兩者の比較は一對九十の割合(千九百十九年三月)にして如斯き形勢は他國にては到底之れを見る事を得ざるなり、製造費及び一般費は他外國に比するときは低廉なるも其比例は普通なり、利息に對する賦課は寧ろ高率に失するも目下操業しつつある設備が特殊の状態の下に在るが故に又止むを得ざるなり、左の統計表は千九百十九年、鑄鑛爐部に於ける元價材料を基礎として算出したるものなり。

壹噸代價	日貨	原料	勞力	製造費	一般費	財政費
		(百分率)	(百分率)	(百分率)	(百分率)	(百分率)
一月	四七、四二(四、八三)	七六、九	一、二	一一、四	四、〇	六、〇
二月	四五、三二(二、〇〇)	七二、七	一、四	一一、〇	六、一	七、七
三月	五二、九八(四、八〇)	七三、六	〇、八	一三、二	六、二	六、二
四月	四八、二一(六、三三)	七五、六	一、二	一一、三	五、二	五、七
五月	四七、七二(五、三三)	七七、六	一、一	一一、三	四、二	四、八
六月	四七、五〇(四、九〇)	七八、五	一、〇	一一、八	三、九	四、八

拔萃 米國に於ける製鐵業一般狀況

七月 五〇、四七(五、三三) 七九、八 一、〇 一〇、五 四、三 四、六
 平均 四八、五一(六、七七) 七六、四 一、一 一一、〇 四、八 五、七

本文換算は大正八年の上海平均相場に依る(墨銀)

一弗は日貨一圓七十八錢九厘の割合

(完)

米國に於ける製鐵業一般狀況

熊崎紐育總領事報告

總說

一九一一年以來の米國の製鐵業を觀るに時に消長あるも毎年其産額を増加するの傾向を有せり。即ち一九一一年の産額は銑鐵二千三百六十五萬噸(長噸以下同)鋼二千三百六十七萬六千噸なりしに歐洲大戰開始前の一九一三年には前者は三千九十六萬六千噸に達し後者は三千一百三十萬一千噸に及びたるに翌一四年には却て兩者共に減退を示せるが是れ米國製鐵業のみの現象に非ずして世界四大産鐵國始んど同様の状態を示せり(別表第一、二表參照)然るに米國は一九一五年に於て銑鐵二千九百九十一萬六千噸、鋼三千二百十五萬一千噸を産して從來の記録を破りたるに翌一六年より一八年に在りては毎年銑鐵及鋼の總産額實に八千四百萬噸以上に達しつつありしなり。而して當時は内國の消費を充たすの外軍需品、造船其他の材料として歐洲其他に輸出せられ、其生産高は未だ以て之が必要に應じ得ざるを恐るる程の盛況を示せり。然るに一九一八年の休戰條約に次で翌一九年平和條約締結さるるに至りて鐵に對する需要起らず、一方に於ては値段下落し加ふるに同年秋季鐵工の大同盟罷業起りたる爲其産額著しく減退し銑

鐵三千一百〇一萬五千噸、鋼三千四百六十七萬噸に下れり、而して一昨年より昨年に入りて益々其産額を減じ一月以來特に減少を示せり。(第二表参照)

一般需要の盛なりし時期は、原料たる鐵鑛の値段は勿論、製鐵上必要なる石炭及骸炭の値段に至るまで悉く騰貴し自然鐵の値段甚しく騰貴し來りたるも昨年四月十二日より値下を斷行して一般市場に順應することとなしたるが勞銀の如きも鐵の需要多かりし間は甚しく上騰し昨年中の最高賃銀は一九一六年に比し十五割以上に達せるが昨年五月十六日以後は平均二割方の賃銀値下を爲し漸次普通状態に回復することを圖りつつあり。

左に世界の銑鐵及鋼の生産狀況に關する一覽表を掲ぐ

第一表 世界の銑鐵生産額

年	米 國	英 國	獨 逸	佛 國
一九一一年	三三、六五〇、〇〇〇	九、五三六、〇〇〇	一五、五三四、〇〇〇	四、四三六、〇〇〇
一九一二年	二九、七二七、〇〇〇	八、七五二、〇〇〇	一七、七五三、〇〇〇	四、九三九、〇〇〇
一九一三年	三〇、九六六、〇〇〇	一〇、二六〇、〇〇〇	一九、三二二、〇〇〇	五、三〇七、〇〇〇
一九一四年	三三、三三三、〇〇〇	八、七三四、〇〇〇	一四、三三三、〇〇〇	...
一九一五年	二九、九二六、〇〇〇	九、四八八、〇〇〇	一三、七九〇、〇〇〇	...
一九一六年	三九、四三三、〇〇〇	九、四八八、〇〇〇	一三、一八五、〇〇〇	一、四七〇、〇〇〇
一九一七年	三六、六二二、〇〇〇	九、四三〇、〇〇〇	一三、一四三、〇〇〇	一、六八四、〇〇〇
一九一八年	三九、〇五二、〇〇〇	九、〇〇六、〇〇〇	一三、五九〇、〇〇〇	一、三九七、〇〇〇
一九一九年	三三、〇一五、〇〇〇

第二表 世界の鋼生産額

年	米 國	英 國	獨 逸	佛 國
一九一一年	三三、六六六、〇〇〇	六、四六二、〇〇〇	一五、〇一九、〇〇〇	三、六八一、〇〇〇
一九一二年	三三、三三三、〇〇〇	六、七九六、〇〇〇	一七、三〇三、〇〇〇	四、四三六、〇〇〇
一九一三年	三三、〇一五、〇〇〇	七、六四四、〇〇〇	一八、九九五、〇〇〇	四、六七〇、〇〇〇

第三表 米國の毎日(月別)銑鐵生産高

年	月	生産高	計	
一九二〇年	三月	七、八八五、〇〇〇	一四、九七三、〇〇〇	
	四月	八、五五〇、〇〇〇	一三、二五六、〇〇〇	
	五月	九、一六六、〇〇〇	一六、一八三、〇〇〇	
	六月	九、八〇四、〇〇〇	一六、五八七、〇〇〇	
	七月	九、九七一、〇〇〇	一四、八七四、〇〇〇	
	八月	
	九月	
	十月	
	十一月	
	十二月	
	一九二一年	一月
		二月
三月		
四月		

一 鐵鑛、石炭及骸炭の價格

鐵鑛 鐵鑛の値段は鐵及其製品の需要の關係により高低を來すと共に鐵鑛産額の多少に依て影響を被ること大なるが元來米國に於ける鐵鑛の産地はミネソタ州メサビ及びアラバマ州バーミンガムの附近を主たるものとし前者の産額は之を湖水及鐵路に依り中部東部地方の製鐵所に配送するを常とし而も其價格は水陸兩者の間に協定率

あるを以て殆んど同額と見ることを得る事情なるが今左に一
九一一年以來のイリノ湖船渠着値段を標準としたる相場を左
に表示すべし。

第四表 自一九一一年至一九一九年シユーペリオル湖鐵
鑛のイリノ湖船渠着値段表

年	ヲールレンジ		メサピ	
	ベセマー 仙	非ベセマー 仙	ベセマー 仙	非ベセマー 仙
一九一一年	四・五〇	三・七〇	四・二五	三・五〇
一九一二年	三・七五	三・〇〇	三・五〇	二・八五
一九一三年	四・四〇	三・六〇	四・一五	三・四〇
一九一四年	三・七五	三・〇〇	三・五〇	二・八五
一九一五年	三・七五	三・〇〇	三・四五	二・八〇
一九一六年	四・四五	三・七〇	四・二〇	三・五五
一九一七年	五・九五	五・二〇	五・七〇	五・〇五
一九一八年	五・九五	五・二〇	五・七〇	五・〇五
同年七月一日	六・四〇	五・六五	六・一五	五・五〇
同年十月一日	六・六五	五・九〇	六・四〇	五・七五
一九一九年	六・四五	五・七〇	六・二〇	五・五五

備考 前表がイリノ湖船渠の着値を標準とせなるはピッツバーク及オホヨ
州ヤングスタウンに近接せるを以て其配達は水運又は鐵路による

ロ、石炭 製鐵所に於て使用する石炭の値段は一般市價と
異なる所あるべきも大體別表に示せる産地相場を標準とするも
のと思考せらる。

産地	四月三十日値段		五月十四日値段	
	仙	非仙	仙	非仙
ピッツバーク	三・二五	二・二五	二・二五	二・五〇
中部ペンシルバニア	三・七五	四・〇〇	三・七五	四・〇〇
コンネルスビル	一・八五	二・〇〇	一・八五	二・〇〇
西バージニア	三・五〇	三・七五	三・五〇	四・〇〇
ケンタッキー	二・六五	二・八五	二・三五	二・七五

抜 率 米國に於ける製鐵業一般狀況

イリノイス	二・七五—三・五〇	二・七五—三・五〇
インディアナ	三・八五—十	三・八五—十
無煙炭	七・二〇—七・七五	七・二〇—七・七五

備考 本表は山渡し又は竈渡し値段を示し、十印は契約値段を示す

八、骸炭 骸炭製造の中心地たるコンネルスヅイルに於て
發表せる所に依れば一九一一年の平均値段は一弗七十二仙
(一噸に付以下同じ)なりしを一九一四年には二弗に達し、一
九一五年に至り一度一弗八十仙に下れるも一九一六年には二
弗五十八仙となり、一九一七年に於て一躍六弗二十仙に上り
たるもの翌一九一八年には更に七弗二十五仙となり、鐵及鐵
製品の需要増加及其値段の騰貴と相俟て上騰する傾向ありし
に歐洲大戰終局を告ぐると共に下落を始め一九一九年には四
弗七十仙となりたるが昨年五月三日發行のアイアンエーシ誌
の傳ふる所に依れば一九二一年本品の竈渡し正味一噸の値段
は左表の如く漸次下落を告げつつあり。

骸炭 (コンネルスビル) 値段表 (但竈渡し正味一噸に付)

産地	五月三日	四月二六日	四月五日	五月四日
爐用骸炭 (速時拂)	三・二五	三・二五	三・七五	一・〇〇
爐用骸炭 (後拂)	三・四〇	三・七五	四・〇〇	一・〇〇
鑄造所骸炭 (速時拂)	四・五〇	四・五〇	五・〇〇	二・〇〇
鑄造所骸炭 (後拂)	五・〇〇	五・〇〇	五・五〇	二・〇〇

二 労働狀況及勞銀

イ、勞銀

製鐵所に就働する労働者の賃銀の状態を觀るに一九一六年
以來頻りに値上を爲し一昨年二月一日の引上を以て一九一五
年の賃銀に對し實に十五割三分(不熟練職工を標準とし)の
値上となる次第なり、然るにユー、エス、スチール、コーポレ

1 ションは愈々昨年五月十六日より二割方引下を爲し以て經濟界の變動に應ずることとなりたるが職工等は此條件に服して從來の如く就働するもの如し、而して今其賃銀二割減の結果を見るに八時間労働者は一日三弗六十八仙より二弗九十六仙となり十時間労働者は五弗六仙より四弗七仙に下り、十二時労働者は六弗四十四仙より五弗十八仙となる而して同組合の一九二〇年々報に依れば同年中使用せる雇人は二十六萬七千三百四十五人にして其俸給及賃銀合計五億八千一百萬弗に達し居るが故に今回二割の減給を行ふ時は一箇年一億一千六百萬弗の節約を爲すことを得るとなるも事實上同組合は一年以來其生産高を減少する爲め職工の非常なる減員を行へる結果目下十二萬五千乃至十五萬人を使用するに過ぎずと云ふを以て觀れば全體の賃銀は前記總額の約半額に過ぎざるものと觀ることを得べし。

左に一九一五年以來勞銀増加の割合、一日の賃銀額（十時間労働者を標準とし）を示すべし。

引上年月日	一日十時労働者の一日取得賃銀	引上割合 割分	一九一五年の賃銀に對し増加せる割合 割分
一九一五年	二・〇〇	一〇・〇	一〇・〇
一九一六年二月一日	二・二〇	一三・六	二五・〇
同 年五月一日	二・五〇	一〇・〇	三七・五
同 年十二月十五日	二・七五	九・〇	五〇・〇
一九一七年五月一日	三・〇〇	一〇・〇	六五・〇
同 年十月一日	三・三〇	一〇・五	九〇・〇
一九一八年四月十六日	三・八〇	一〇・〇	一一〇・〇
同 年八月一日	四・二〇	一〇・〇	一三一・〇
同 年十月一日	四・六二	一〇・〇	一五三・〇
一九二〇年二月一日	五・〇六	一〇・〇	

一九二二年五月十六日 四・〇五 二〇・〇 一〇二・五
 又勞銀と鋼一噸の生産費の關係を見るに一昨年中最高の賃銀を支拂ひし際は其生産費中四十弗八十仙は實に勞銀たりしなり故に今勞銀に二割の減少を爲す時は一噸に付八弗十六仙の節約となり其結果三十二弗六十四仙の勞銀を包含することとなる。

左に一九一一年より一九二〇年に至る一箇年の平均一人當賃銀及精製鋼一噸の生産費中に包含する勞銀の高を掲ぐべし

年	一箇年一人當賃銀	鋼一噸生産費中に包含する勞銀
一九二〇年	二、一七三 ^弗	四〇・八〇 ^仙
一九一九年	一、九〇三	三九・九五
一九一八年	一、六八五	三二・六四
一九一七年	一、二〇八	二三・二四
一九一六年	一、〇四二	一七・〇四
一九一五年	九二五	一五・〇三
一九一四年	九〇五	一八・〇一
一九一三年	九〇五	一六・七四
一九一二年	八五七	一五・一三
一九一一年	八二〇	一七・〇〇

ロ、労働運動

製鐵所に就働する労働者の所謂労働運動は一九一九年秋季に起る鐵工同盟罷工を最大なるものと爲す、同運動は歐洲大戰の直接影響にして且つ近き結果として起れるものにして労働者側に於ては賃銀の値上と労働時間の短縮を要求せる者なるが結局多少の増給を以て落着いたれども爾來労働者側に組合組織の風行はるゝに至りたるを以てユー、エス、スチールコーポレーションを始として各製鐵所とも之が發達を妨げ甚しきに至りては組合に屬するものは使用せざるに至れり、故

に現今に於ては組合員は殆んど工場より影を没するに至れりと傳へらる、而して今回の賃銀低減に於ても内部には殆んど不平を耳にせざるが唯米國聯合労働組合役員會に於ては之を以て不當なる値下なりと爲し昨年六月十九日コロラド州傳馬にて開かれたる労働大會に本問題を提出するに至れり、然れども兎角、目下の不景氣は何人と雖承認する状態なれば、事實上一九二〇年頃の賃銀を支給することは不可能事にして、殊に不平職工は何時にも解雇さるる危険あるを以て労働者も多くは此の事情を了解し居るを以て特殊の事件勃發せざる限りは最近に於いて鐵工等の所謂労働運動は起り得ざるべし。

三 鐵類の値段

鐵類の値段は一昨年五月初日に比し異常なる下落を來せるが殊に古原料鐵類に於て甚しく昨年五月三日の指數は殆ど一昨年の同期に對し半額以下に下れり而して其他の鐵類も一般に一割乃至三割五分の値下行はれたるが實取引に於ては尙値下を爲すものありと傳へられつつあり、左に各種鐵類の指數を擧げて參考と爲す。

第五表 古原料鐵類一長噸の値段

種別	一九二一年五月三日	一九二〇年五月四日
車輛	シカゴ 一四・五〇	三七・〇〇
同	ヒラデルヒア 一六・〇〇	四〇・〇〇
重鋼屑	同 一三・〇〇	二五・〇〇
同	ヒラデルヒア 一一・〇〇	二四・〇〇
同	シカゴ 一一・五〇	二三・〇〇
一號鑄物	同 一八・〇〇	三二・〇〇
同	ヒラデルヒア 一八・〇〇	三八・〇〇

抜 萃 米國に於ける製鐵業一般狀況

一號鑄物(短噸)	シカゴ 一三・五〇	三七・五〇
一號鐵道鍛鐵	ヒラデルヒア 一五・〇〇	三四・〇〇
同(短噸)	シカゴ 一〇・〇〇	二六・五〇

第六表 大口買手に對する鐵板釘及鐵線一封度値段

種別	一九二一年五月三日	一九二〇年五月四日
シートのブラック二八番、ピッツバーク	四・〇〇	五・五〇
同 鍍二八番	五・〇〇	七・〇〇
同 ブリニュー9x10	三・一〇	四・五〇
ワイヤネール、ピッツバーク	三・二五	四・〇〇
プレインワイヤ 同	三・〇〇	三・五〇
パイブドワイヤ	四・一〇	四・四五
チンプレート百封度箱	六・二五	七・〇〇

第七表 大口買手に對する鐵及鋼一封度値段

種別	一九二一年五月三日	一九二〇年五月四日
鐵棒	ヒラデルヒア 二・三五	四・二五
同	シカゴ 二・三八	三・七五
鋼棒	同 二・一〇	三・七五
同	同 二・四八	四・〇二
タンクプレート、同	同 二・二〇	三・七五
同	同 二・五八	四・〇二
ビーム等	同 二・二〇	三・一〇
同	同 二・五〇	三・二七
スチールフープス	同 二・七五	五・〇〇

第八表 軌條及棒一長噸の値段

種別	一九二一年五月三日	一九二〇年五月四日
ベセマー重軌條、工場渡	四・五〇	五・五〇
平爐重軌條	四・七〇	五・七〇
ベセマービレット	三・七〇	六・〇〇
同	三・七〇	六・〇〇
平爐ビレット	三・七〇	六・〇〇
同	三・九〇	八・〇〇
平爐シートバー	同	八・〇〇
フォジングビレット、ヒラデルヒア	四・二〇	八・〇〇

三五七

平爐ビレット	同	四二・七四	六四・〇〇
ワイヤロッド、	ビツツバーク	四八・〇〇	七〇・〇〇
	(以下封度に付)		
スケルプ鍍、スチール	同	二二・〇〇	二七・五
スケルプ、スチール	同	二二・〇〇	三〇・〇〇

第九表 銑鐵一長噸の値段

種 別	一九二一年五月三日	一九二〇年五月四日
二號、ヒラデルヒア×	二五・八四	四七・〇五
二號、バレー爐×	二四・〇〇	四三・〇〇
二號、南シンシナチー×	二七・七五	四五・六〇
二號、バーミングハム、アラバマ×	二三・〇〇	四二・〇〇
二號鑄物用銑、シカゴ×	二三・〇〇	四三・〇〇
ペーシツク、東ペンシルバニア	二五・〇〇	四四・八〇
同 バレー爐	二二・五〇	四三・〇〇
ベセマー、ビツツバーク×	二六・九六	四三・九〇
マリエーブル、シカゴ×	二四・〇〇	四三・五〇
マリエーブル、バレー	二四・五〇	四三・〇〇
グレーフオーヂ、ビツツバーク	二四・九六	四二・四〇
L.S. 木炭、シカゴ	三八・五〇	五七・五〇
滿 俺 鐵	九〇・〇〇	二二五・〇〇

第十表 一九二一年四月十三日以降ビツツバーク

グ渡鐵類値段

品 目	新 値	舊 値	差 額
4x4及へビービレット	三七・〇〇	三八・五〇	一・五〇
スラブ(長噸)	三八・〇〇	四二・〇〇	四・〇〇
シートバー及スモールビレット	三九・〇〇	四七・〇〇	八・〇〇
棒(百封度)	二二・〇〇	二二・三五	〇・二五
プレート及ストラクチュラル(百封度)	二・三〇	二・六五	〇・三五
ワイヤロッド(長噸)	四八・〇〇	五七・〇〇	九・〇〇
プレーンワイヤ	三・〇〇	三・三五	〇・三五
ワイヤネール(一樽)	三・五〇	三・五〇	—

チンプレート(ベース箱) 六・二五 七・〇〇 一・二五

四 鐵類の輸出入狀況

イ、輸出貿易

米國に於ける鐵類の輸出狀況を觀るに銑鐵の如きは一九一八年以來其數量價格共に減退し一九一八年には約二十六萬九千噸の輸出を見、翌一九一九年には約三十二萬一千噸に達したれども一九二〇年には二十一萬六千噸に下れり、而して銑鐵、棒地金、鋼、鐵線の如きも著しく減少を示せるが唯古鐵船材及タンク材は却て其輸出を増加せり、即ち古鐵は一九一八年には僅に約二千噸の輸出なるに翌年には二萬七千噸以上に達し一九二〇年には二十一萬九千噸以上の輸出を見、從て其價格も一九二〇年には六百四十一萬一千弗以上に及べり。又船材及タンク材は一九一八年に於て、約六千五百五十二萬封度の輸出を爲し翌一九一九年には其半額以下に下りたるに、昨年は九千五百九十三萬封度以上の輸出を爲すに至れり。

左に鐵類の輸出入額を表示す(鐵製品は略す)

第十一表 自一九一八年銑鐵輸出數量價格(數量單位噸、價格單位弗)

種別	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
滿俺鐵	數量 三、五七七 價格 八〇六、〇八七	數量 二、九九九 價格 四四五、八四〇	數量 三、四五四 價格 六四二、五七〇
珪素鐵	數量 四、一〇七 價格 四四三、四五六	數量 一、五四四 價格 一四五、三一〇	數量 一、六三二 價格 四一、〇五七
其他	數量 二六一、八九一 價格 一〇、三七六、七二一	數量 三二六、七一八 價格 一一、七二二、〇三三	數量 三二二、七四二 價格 九、三九〇、七五〇
計	數量 二六九、五七五 價格 一、五七六、七二一	數量 三二一、二六一 價格 一二、三三三、一八三	數量 二一六、八二八 價格 一〇、〇七四、三七七

第十二表 自一九一八年銑鐵の國別輸出數量價格(數量單位噸、價格單位弗)

(米國外國貿易月報)

國別	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
白耳義	數量 價額	二八、六八〇	一、三二一、八二四
丁抹	數量 價額	二、二三八	一三六、四五八
佛國	數量 價額	六八三	二四、五一二
伊國	數量 價額	六七、一二三	三六、一八二
英本國	數量 價額	五、五二〇、九九七	一、六二二、〇八一
加奈陀	數量 價額	四一、三〇五	一六、九九五
玖瑪	數量 價額	七四、一〇一	八二八、一〇四
亞爾然丁	數量 價額	二、〇二四、三〇五	五、六、一〇〇
智利	數量 價額	二、四八一、五四一	二、八七二、四六六
日本	數量 價額	一、〇五二、一〇三	一、二六八
其他	數量 價額	三三、七五一	六〇、三〇二

第十三表

自一九一八年古鐵鐵棒等の輸出數量及價格 (價格單位弗)

種別	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
鐵棒	數量 價額	二七、二七五	三九、三五九
銑鐵棒	數量 價額	七、七三五	六、四二一、五五〇
銅鐵線(棒)	數量 價額	一、四九、四九六	一、四四九、一八〇
其他	數量 價額	五、六四三、九八	四、六五七、四七四
計	數量 價額	二六、四三三、三六	二六、五五五、五八

拔萃 米國に於ける製鐵業一般狀況

第十四表 自一九一八年鐵道軌條及船材輸出數量及價格 (價格單位弗)

種別	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
鋼軌	數量 價額	四、五三、五七	六、五三、四三
船材及タンク材	數量 價額	三、九六六、八五五	三、〇六五、五五
計	數量 價額	八、五〇〇、四二二	九、五九九、九八

今米國の輸入しつつある銑鐵、鋼地金、鋼塊鋼板等に就て觀るに一九一八年以來銑鐵は其數量及價格共に著しき増加を示し即ち一九一八年には約三萬四千噸の輸入なるに翌年には十萬噸以上に達し一昨年は十九萬六千噸を超過せり、而して鋼地金、鋼塊、鋼板及鋼棒も一八年と一九年との輸入數量を比較する時は減退を示したれども二〇年に至りて約五千六百二十八萬封度に上り其前年に比すれば約二千萬封度の増加なり尙左表に其詳細を表示す。(主要鐵材に對する統計のみを掲載す)

第十五表

自一九一八年銑鐵輸入數量價格 (數量單位噸、價格單位弗)

種別	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
滿倫鐵	數量 價額	二七、一六八	三三、〇二二
珪素鐵	數量 價額	四、二五八、七四五	四、二八三、五四一
其他	數量 價額	五、五四〇	一〇、四四五
計	數量 價額	三二、九六六	四七、二一八

三五九

第十六表 自一九一八年鋼地金、鋼塊、鋼板、鋼棒

等輸入數量及價格(數量單位封度) (價格單位弗)

種別	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
ベセマー或は平爐にて製造せるもの	九二〇四九三 三七〇〇一七	六四四八四 三八八八四五	五三〇〇五 四八九三〇〇

五 東洋向輸出運賃

米國に於ける主要製鐵區域より東洋方面に輸出さるる鐵は左表運賃に依るものなり、而して船賃は太平洋及大西洋に於ける鐵運搬をなしつつある各汽船會社の協定に成るものを擧げたるが此協定に入らざるものは協定率以下の運賃を以て運搬するが如く殊に大西洋及墨西哥灣諸港より横濱まで一噸に付き十二、三弗位の安値を以て引受くるものありと云ふ。

積出地	太平洋沿岸諸港までの鐵道運賃	太平洋沿岸諸港より横濱までの船賃
市 俄 古	百封度に付〇・七一	一噸に付 五・八八
パーミンガム	〇・八〇	一噸に付
ヤングスタウン	〇・八〇	一噸に付
ビツクパーク	〇・八〇	一噸に付
市 俄 古	百封度に付〇・六三	一噸に付 一六・〇〇
パーミンガム	〇・四八	一噸に付
ヤングスタウン	〇・四二	一噸に付
ビツクパーク	〇・三八	一噸に付

六 平和後製鐵會社の採りたる方策及其實蹟

米國製鐵會社中歐洲大戰の終結後直に其營業方針に變更を加へたるものはベススレヘム製鐵會社、レバブリック製鐵會社、ラツカワナ鐵鋼會社、ミトゲエール製鐵會社が中心となり彼の外國貿易の爲に又トラスト法の例外を承認せる

Webb 法の下に Consolidated Steel Corporation を組織したることとなるが同組合の目的は相互利益の増進及互に外國註文の奪取の爲起るべき競争を避くるにありユー・エス・スチール・コーポレーションに次ぐ大組織組合を形成せり、而して法律上同組合の其組合員たる各製鐵所に對する關係は單に對外貿易の上に止まるべきも勢其産額の増減の如きも左右さるものなるべく其實蹟に於ても多大の効果ありと思考せらる、而して該組合の外には敢て何等特殊の施設なきが如し。

元來米國製鐵所はユー・エス・スチール・コーポレーションに屬するものを始とし毎年製作は凡て註文を待て後豫算を立て、製造するの例なるを以て歐洲大戰終結の後と雖も直に事業を縮小することなく、一九一九年の産額は銑鐵約三千九百五萬噸にして一九一七年の産額に對し約四十萬噸の減少に過ぎざりしなり。而して其輸出に於ても一九一九年には銑鐵約三十二萬噸の輸出額に達し居れり、從て一九一九年に至るまでは兎に角製鐵業の不振と稱することを得ざりしも一九二〇年春以來本邦に次で各國の經濟界變動せる爲新規註文の減退と既成註文の取消との爲勢其産額に制限を加ふる必要に迫り一昨年は約千六百萬噸の生産を爲せるに過ぎざるもの如く過去三箇年間の平均産額約四千五百萬噸に對し三割六分に過ぎざる状態なり。

事情前述の如く一般市場の需給關係を測定して製作するが故に在庫品は意外に少かるべく其分量に至りては數字的に知ることを得ず。(完)